

東海村制70周年記念 塙南可・千里展 ～むらをうつす～



東海村を代表する人物として、塙南可さん(画家)・塙千里さん(歌人)のお二人を取り上げた企画展です。彼らはどのように村を見て、その姿を画や歌に写したのか——。二人の作品を通して、村の日常や変化、心性を感じてみませんか。



期間▼11月2日(土)～令和7年1月26日(日)

※休館日など詳細は、村公式ホームページをご覧ください。

時間▼午前9時～午後7時(土・日曜日、祝日は午前9時～午後5時)

場所▼歴史と未来の交流館

入場料▼無料

問い合わせ▼生涯学習課博物館・文化財担当(歴史と未来の交流館内 ☎287-0851)



▲村公式HP

ふるさと歴史

～歴史を再発見～

硯の中の小さな大発見

今から20年ほど前、東海村の海岸部に位置する村松白根遺跡から、一風変わった硯が発見されました。一見すると、その姿形は、今の硯とほとんど変わりませんが、硯石に選ばれた岩石の中に驚きの事実が隠されていました。

村松白根遺跡は、室町時代以降の塩づくりの「ムラ」の跡として知られています。遺跡出土の硯は、このムラ(地域)に文字を書く人がいたことを示す重要な証拠です。もしかすると、今回紹介する硯は、製塩を管理した人物が塩の生産量や出荷先などの情報を書き記すために使用したものかもしれません。

ところで、県内の硯石を見ると、江戸時代以降では、久慈黒石(常陸大宮市)や国寿石(大子町)とも呼ばれる頁岩や粘板岩が有名です。これらは、栃木県との県境付近に連なる八溝山地を起源とする中生代ジュラ紀(約1億7000万年前)の堆積岩です。



【硯とコケムシの化石】

の南西部(日立市域)ということですが、このことは、中世以降の硯石やその流通を考える上で重要です。きっと、この硯の持ち主も見慣れた硯の中に、まさか太古の化石が含まれていたとは、夢にも思わなかったことでしょう。

歴史と未来の交流館学芸員

中泉 雄太

では、本硯の石材には、どの地域の石が選ばれたのでしょうか。

菊池芳文博士(千葉科学大学)と共に硯を観察したところ、使用石材は粘板岩でした。しかし、県内には粘板岩の産地が複数あるため、問題はどの地域の粘板岩かということとです。産地解明の手掛かりは、思わぬところにありました。

実は、硯の表面を観察した際に「コケムシ」という動物の小さな化石を発見しました。近隣でコケムシの化石を含む粘板岩は、古生代ペルム紀(約2億5000万年前)に堆積した「鮎川層」に限られます。つまり、硯石の故郷は、村北方の阿武隈山地(高地)